

はじめに

愛知県美術館館長 村田 真宏

愛知県美術館では、木村定三コレクションの受贈以来、継続して調査研究および保存処置を続け、大小のテーマ性のある展示を行なうことはもとより、その成果を反映した出版物を刊行して参りました。『木村定三コレクション研究紀要』が毎年、その年の研究成果を定期的に御報告することを目的としているのに対し、この『木村定三コレクション研究報告書』は、不定期ながら、一つのテーマを設定し、美術館が作品資料を受増した後行う、各種の調査研究、資料整理の方法、および保存処置などについて紹介することを目的とした報告書で、今回はその第3号となります。

今回も、受贈作品2480件のうち1点の作品に焦点をあて、一つの未知の作品・資料に対し、美術館がどのようなアプローチを行っているのかということを紹介いたします。その作品は、受入登録時に「M1027」というコレクション番号がつけられ、《鉄製交椅》と仮に命名されたものです。このコレクションの一括受入は、木村定三氏が亡くなられた後、短期間に受入手続きを行う必要があったため、二千点を超える作品について、個々に資料的価値や歴史的位置づけを、十分に検討することができなかったという事情がありました。そのため、コレクション全体について、受入後に改めて各分野の研究者の方々の協力を得て、調査研究ならびに保存処置を進めてまいりました。とりわけ、この《鉄製交椅》として受入れた作品は、その後の研究成果により、注目すべき資料であることが明らかになり、《高麗鉄地金銀象嵌鏡架》という作品名を付けられるまでになりました。ここに至るまでには、久保智康氏をはじめとする研究者の方々、保存処置を進めるなかで貴重なデータや所見をご提供いただいた元興寺文化財研究所、さらに、X線CTスキャナーによる調査を実施していただいた九州国立博物館、奈良文化財研究所をはじめ、多くの方々のご協力をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げますとともに、この報告が、今後のさらなる作品研究の端緒となることを願っております。